古英語・中英語における否定的不定辞の NPI と NQ の境界

目的語の語順を中心に*

柳　朋宏

1. はじめに

本論では、古英語コーパス YCOE から得られたデータに基づき、初期英語の「否定呼応」文において、否定的不定辞 nænig ‘not-any’を含む目的語の分布は、否定目的語ではなく、量化目的語の分布に近いことを示す。また、否定極性項目 ænig ‘any’を含む目的語の分布とも近いことから、否定辞 ne を含む文では否定的不定辞 nænig は「否定極性項目」として、否定辞を含まない文では「否定数量詞」として機能していたと主張する。

2. 対格の否定的不定辞 nænig の分布[1]

古英語の否定的不定辞 nænig ‘not-any’は、語源的には、否定極性項目 ænig ‘any’と否定辞 ne が融合したものである。*The Oxford English Dictionary* (OED)によれば、初出例は c725 年のラテン語グロッサリーからの引用で、ラテン語 nullo の訳語として用いられている。古英語文としては、(1)に挙げる 805 年からの引用がある。例文中否定的不定辞は太字で示す。

(1) [Þæt] **nænig** mon . . . on **nænig** oðre halfe oncærrende sie.
that not-any man in not-any other half changing be
‘(that) no man . . . shall make any change in any other half’ (*Charter* 34 in *O.E. Texts* 442/OED s.v. †*nany*)

この否定的不定辞 nænig は、西サクソン方言では用いられておらず、ノーサンブリア方言・マーシャ方言に偏っている (Ingham (2006), Mitchell (1985: §§436–441))。また時代的には、初期古英語で主に用いられており、後期古英語ではほとんど用いられておらず、OED によれば、(2)に示す 15 世紀の例が最後の例として挙げられている。

(2) That **neany** enmys [c1450 *Rome* **noon** enemys] ytt greve.
that not-any enemies no enemies it arose
‘that it arose no enemies’ (?a1450 *Siege Calais* (Galba) 156 (*MED*)/OED s.v. †*nany* A.)

(2)の例が示すように、写本により neany ‘not-any’と noon ‘no’との交替がみられる。

否定的不定辞 nænig を含む用例について YCOE を調査した結果、主格の例が 205 例であったのに対し、対格の例は 73 例であった。作品では Bede’s *Ecclesiastical History of the English People*, Gregory’s *Dialogues* (GD (C)), *Blickling Homilies* にほぼ限られていた。同じ Gregory’s *Dialogues* でも写本 H (GD (H))では nænig は用いられていなかった。

この否定的不定辞 nænig を含む対格目的語と語彙動詞との相対語順を調査した結果、否定辞 ne を含む文と含まない文とでは、「目的語－動詞」語順の割合に違いがみられた。つまり、否定辞を含む場合、全体の 65.0%が「目的語－動詞」語順であったのに対し、否定辞を含まない場合は、全ての例が「目的語－動詞」語順であった。否定辞 ne を含む「目的語－動詞」語順の例を(3a)に、「動詞－目的語」語順の例を(3b)に、また、否定辞を含まない「目的語－動詞」語順の例を(4)に、それぞれ示す。例文中、対格目的語には下線を引き、語彙動詞には枠を付す。

(3) a. þæthe **næfre** **<u>nænige godcunde englas</u>** *<u>næfde</u>* buton hundlice englas
thathe never not-any god-like angels NEG-had but dog-like angels
‘that he never had any god-like angels, but dog-like angels’ (LS 32 (PeterandPaul[BlHom_15]) 181.186)

b. and *ne* <u>bideþ</u> he æt us **<u>nænig oþor edlean</u>**
and NEG asks he at us not-any other recompense
‘and he asks of us no other recompense’ (HomU 19 (BlHom_8) 103.115)

(4) and cwædon, þæt heo **<u>nænigne incan</u>** to him <u>wiston</u>
and said that they not-any offense to him knew
‘and said that they had no rancorous feeling towards him’ (Bede 4 25.348.6)

古英語では、目的語の種類により「目的語－動詞」語順の割合が異なることは Pintzuk and Taylor (2006)で指摘されていることである。彼女らの分析によると、950 年以前の古英語では、「量化目的語－動詞」語順の割合は 63.5%であるのに対し、「否定目的語－動詞」語順の割合は 91.8%であった。これら 2 種類の目的語の分布と比較すると、否定的不定辞を含む目的語の分布は、否定辞を含む文での割合は量化目的語に近く、否定辞を含まない文では否定目的語に近い分布を示していることがわかる。

3. 対格の否定的不定辞 nan と否定極性項目 ænig の分布

次に、もう 1 つの否定的不定辞である nan ‘no, none’の分布と否定極性項目である ænig ‘any’の分布について考察する。否定的不定辞 nan は、語源的には数量詞 an ‘a/an, one’と否定辞 ne が融合したものである。YCOE を調査した結果、前節で考察した nænig ほど、方言・時代による偏りはみられないが、Ælfric の作品で多く用いられていた。GD (H)では nænig は用いられていなかったが、nænig の使用が多かった GD (C)では nan も用いられていた。また、主格の例は全体で 756 例であったのに対し、対格の例は全体で 534 例であった。nænig ほど、主格と対格との頻度の差はなかったが、主格の例が多い点は共通している。

一方、否定辞を含む文における否定極性項目 ænig の分布は、主格の例が 110 例であったのに対し、対格の例は 41 例であった。否定極性項目 ænig は、否定的不定辞 nænig と nan に比べ、使用頻度はかなり少ないことに加え、その使用が Wulfstan の作品(Wulfstan’s *Homilies*, *Canons of Edgar* (D) & (X))に集中していた。否定辞 ne を含む文における否定的不定辞 nan と否定極性項目 ænig の分布の違いを考察することが目的であるので、用例数は少ないが、今回は予備調査として Wulfstan’s *Homilies* を取り上げる。[2]

否定極性項目 ænig を含む対格目的語は、8 例中 5 例(62.5%)が「目的語－動詞」語順を示し、残り 3 例(37.5%)が「動詞－目的語」語順であった。Pintzuk and Taylor (2006)の分析によれば、950 年以降の古英語では、「量化目的語－動詞」語順の割合は 56.4%、「否定目的語－動詞」語順の割合は 78.3%であり、相対的に量化目的語の分布に近い結果となった。また、前節で考察した否定的不定辞 nænig とも近い分布となった。一方、否定的不定辞 nan では 4 例中 4 例が「目的語－動詞」語順をであった。同じ否定的不定辞であるが、nænig とは異なり、相対的には「否定目的語－動詞」語順に近い分布となった。

4. 主格の否定極性項目について

最後に、古英語の否定極性項目 ænig の分布で興味深い事実を指摘しておきたい。否定極性項目 ænig が、否定辞 ne の「作用域」外に生じる例の存在である。現代英語では否定極性項目は否定の作用域内に生じるため、(5)に挙げるような主語と目的語の間に文法性の対比が観察される。

(5) a. *Anybody didn’t eat. (Blanchette (2016: 42)) b. John didn’t eat anything. (Blanchette (2016: 41))

(5b)の目的語 anything は否定辞 not の作用域内にあるため、(5b)は文法的だが、(5a)の主語 anybody は否定辞 not の作用域外にあるため、(5a)は非文となる。古英語では、(6)のように主格の否定極性項目の左側に否定辞 ne が現れることもあったが、(7)のように否定辞 ne が生じないこともあった。

(6) *Ne* **ænig** man oðerne *ne* tyrie
neg any man other NEG irritate
‘No one irritate other person’ (WHom 10c:93)

(7) and æfre **ænig** man oðrum *ne* swicie ealles to swyðe
and ever any man other NEG deceive all to exceedingly
‘and ever no one deceives others exceedingly’ (WHom 10c:88)

(7)に示すような、一般的な否定極性項目の分布と異なる分布の分析については今後の研究課題としたい。[3]

参考文献

Blanchette, F. (2016) “Subject-Object Asymmetries in English Sentences with Two Negatives,” *University of Pennsylvania Working Papers in Linguistics* 22, 40–50.

Ingham, R. (2006) “On Two Negative Concord Dialects in Early English,” *Language Variation and Change* 18, 241–266.

Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, 2 vols., Clarendon Press, Oxford.

Pintzuk, S. and A. Taylor (2006) “The Loss of OV Order in the History of English,” *The Handbook of the History of English*, ed. by A. van Kemenade and B. Los, 249–278, Blackwell, Malden, MA.

柳朋宏 (2019)「古英語における否定的不定辞 nænig の分布と否定呼応」『コーパスからわかる言語変化・変異と言語理論 2』小川芳樹編, 51–72, 開拓社, 東京.

Yanagi, T. (2019) “Negative Polarity Items and Negative Indefinites in the Negative Construction of Old English,” Paper presented at the Conference in Memoriam of Dr. Anne Vainikka, held at Károli Gáspár University, Budapest, Hungary.

* 本稿は、科学研究費 (基盤研究 (C) 課題番号 16K02784) と中部大学特別研究費 A (19L02A) の助成を受けたものである。

1 本節の分析は柳 (2019)の内容に基づいたものである。

2 残り 2 作品（写本違い）*Canon of Edgar* (D)と(X)には、対格 nan を含む例は観察されなかったため、考察の対象外とした。

3 Yanagi (2019)では、統語分析の 1 つの可能性について論じている。